

飼料用米生産コスト低減マニュアル



令和 6 年 6 月

農林水産省

はじめに

食料・農業・農村基本計画（令和2年3月31日閣議決定）において、「近年の飼料用米の作付動向を踏まえ、実需者である飼料業界等が求める米需要に応えられるよう、生産拡大を進めることとし、生産と実需の複数年契約による長期安定的な取引の拡大等を推進する」こととされ、その生産努力目標が、令和12年度までに70万トンとされたところです。

また、その単収については、令和12年度に720kg/10aを目指しており、「日本再興戦略改訂2015」（平成27年6月30日閣議決定）でも、「多収品種の開発や、コストの削減、担い手への農地集積・集約化等を加速させ、10年後（2025年度）にコスト削減や単収増により生産性を2倍に向上（担い手の60kg当たりの生産コストを5割程度低減）させる」との目標が設定されています。

このことから、飼料用米を本作化し低コスト化の取組を推進するため、2025年産に向けて低コスト栽培に取り組もうという飼料用米生産者の具体的な参考となるよう、本マニュアルを改定し、飼料用米にかかる試験研究や機器開発等の技術的成果についてとりまとめました。

また、本マニュアルについては、今後、常に最新の知見を提供するため、新たな成果について適宜情報更新を行うこととします。

目 次

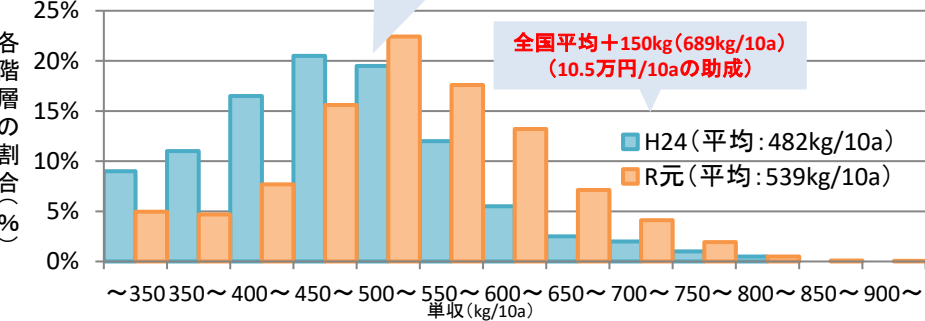
・ 飼料用米生産コスト低減の方向性	1
・ 第1章 多収の達成	
1 取り組む方の条件に応じて収量を確保しやすい品種を作付けましょう	
（1）多収品種について	4
（2）多収品種を使用する際の留意事項	5
2 肥料をしっかりと投入することで多収を実現しましょう	
（1）多収を確保するための多肥栽培	10
（2）輪作の活用	11
・ 第2章 栽培の合理化	
1 育苗・田植え作業における生産コスト低減技術	
（1）直播栽培の導入	15
（2）疎植栽培の導入	21
（3）乳苗移植栽培の導入	22
（4）プール育苗の導入	23
2 施肥管理における生産コスト低減技術	
（1）堆肥の利用	25
（2）安価な肥料の利用	27
（3）施肥作業の省力・低コスト化	29
3 収穫・調製作業等における生産コスト低減技術	
（1）立毛乾燥技術の導入	33
（2）調製工程の簡素化	34
・ 第3章 規模拡大	
適正なほ場の選定を行って効率的な栽培を行いましょう	
（1）農地集積・団地化による大規模化の推進	36
（2）作期分散による大規模化の推進	37
・ 資 料	
低コスト化技術を組み合わせた場合の取組事例	39
参考資料	41

飼料用米生産コスト低減の方向性

1 多収の達成

多収品種の利用と施肥を十分に行うことで多収を達成

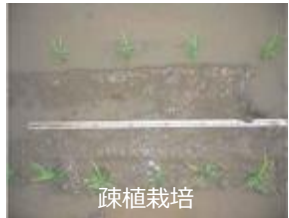
【飼料用米の単収区分別割合】



概要	コスト削減効果 (注1)	掲載頁
多収品種の選択 多肥栽培	13～17%	13p
輪作の活用による 施肥量低減	3%	11p

2 栽培の合理化

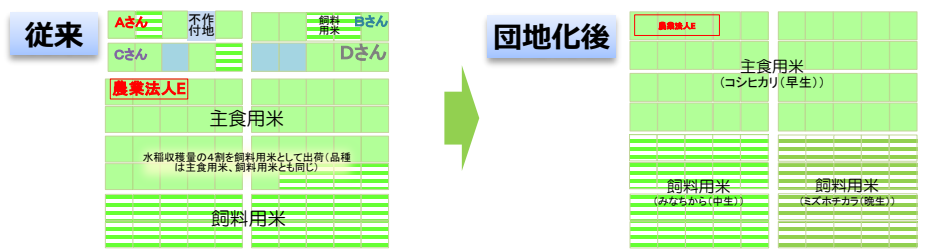
生産費、労働時間の削減が可能な技術の導入



概要	コスト削減効果 (注1,2)	掲載頁
育苗・田植え	直播栽培技術の導入	9～20%
	疎植栽培の導入	3%
	乳苗移植栽培の導入	3%
	プール育苗の導入	4%
施肥	堆肥の利用	0.2%
	安価な肥料の利用	1%
	施肥作業の省力・低コスト化	1～2%
収穫・調製	立毛乾燥技術の導入	0.5%

3 規模拡大

農地集積・団地化、作期分散による生産費の低減



概要	コスト削減効果 (注1)	掲載頁
農地集積・ 団地化	28%	36p
作期分散		

(注1)：コスト削減効果は、農業経営統計調査 令和元年産米生産費（全国・60kg当たり）（以下「令和元年産米生産費」という。）の全算入生産費に対する効果として記載。

(注2)：「2 栽培の合理化」のコスト削減効果は、一部10a当たりの試算データ等を元に収量が技術導入により変化しないことを前提に試算した数値。